

自己統制の2つの志向性と道德教育の目標

2 Orientations of Self-Controle Systems and Objectives of Moral Education

梶田 叡一
奈良学園大学

人は一個の生命体として、基本的に欲求・欲望の塊である。しかし人は、この欲求・欲望を自己統制しなくては日常生活を送ることさえできない。この自己統制の規準となるのが現実適応と価値志向である。そして道德教育は、この自己統制を育成し強化し健全なものにするためのものである。したがって、道德教育の目標については、現実適応的なものか価値志向的なものかが、根本的な検討の視点とならざるをえない。また、自己統制が「我々の世界」を生きることに関わるのか、「我的世界」を生きることに関わるのかも、また基本的な重要性を持つ。こうした視点から、道德教育の目標を考え直してみるための検討を行うことを通じ、今後においては、価値志向的な自己統制に関わるもの、「我的世界」を生きることに関わるものを、道德教育の目標としてもっと取り上げ、重視していくべきではないか、ということが示唆される。

【キーワード】 自己統制 道德的な価値 現実適応と価値志向 「我々の世界」と「我的世界」

【現実適応的な自己統制と価値志向的な自己統制】

人は、基本的には欲求・欲望の塊である。この欲求・欲望は、何よりもまず生命力そのものであり、これと直結しているのが喜・怒・哀・楽といった情動であったり、貪・瞋・痴・慢・疑・見といった煩惱であったりする。

人は成長していくに従って、こうした欲求・欲望のままに動いていくわけに行かないことを学んでいく。自分自身の欲求・欲望のままに動いていくならば、自らの衝動や誘惑に引き回され、内的自由を失ってしまうことになるからである。だからこそ、仏陀が晩年に教えたという「心に従うことなかれ、心を主(アルゴ)とせよ」なのである。また、各自が自らの欲求・欲望のまま動いて行くならば、それぞれの満ち足りようとの思いでの言動が他の人のそれとの間で不断の摩擦や衝突を生じざるをえない。そうすればまさに、「万人の万人に対する闘い」(ホッブス『市民論』1642)となることも明らかである。

こうした欲求・欲望をコントロールし、方向づける働きが自己統制であり、慎みや賢さの、そして心豊かさの基盤はこれである。こうした自己統制を發動させるに際して、大別して2つのタイプのもを区別しておかなくてはならない。

まず第1は、現実の諸条件に合致するような形で欲求・欲望の充足がおこなわれるように自己を統制する、というものである。このために必要とされるのが現実検証力であり、周囲の状況や自己の立場、

置かれた場所等々を見てとって最も妥当適切な形で欲求・欲望を充足しようとするようになる。つまり、TPO(時・場・場合)を認識し、そこで一般的なルールを認識し、それに合致した形で自己の欲求・欲望の充足を図る、ということである。精神分析的に言うならば、「自我」の機能=現実検証に基づく適応的自己統制、ということになるであろう。これが十分に働かなくては我々は現実の諸条件の中で生存を保っていくことが不可能となる。これを現実適応的自己統制と呼んでおくことにしたい。

もう1つ、第2のタイプの自己統制は、「かくあるべき」という価値基準に基づいて自己を統制する、というものである。これは価値志向力でも呼ぶべきものであり、自分のその時その場の現実的利害を超えてでも真・善・美・聖などの価値を実現したいという働きである。こうした価値志向は、時には、TPOといった現実的諸条件を超えてまで、その時その場の一般的なルールに反してまで、さらには自己の生存自体を脅かす危険を冒してまで、「かくあるべき」ところの実現に向かって自己統制を方向づけていくことになる。吉田松陰の辞世の歌とも伝えられている「かくすれば かくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂」など、そうした在り方を典型的に示すものではないだろうか。これは、精神分析的に言うならば、「超自我」の機能=価値原則に基づく自己統制、ということになるであろう。これを価値志向的自己統制と呼んでおくことにしたい。

この両タイプの自己統制の仕方を共に発達させていこうという営みが、道徳教育にほかならない。道徳とは個人の内面世界において自己の行為を規制する規範であり、「人の 踏み行すべき道」として意識されるものである。そしてこれが、自己の生き方を貫く原理ともなっていくものである。教育が「人格の完成」を目指すものであるとするならば、その中核に位置するものこそ、まさにこうした道徳教育なのである。ここで述べた2つのタイプの自己統制との関連で言うならば、道徳教育は、人が日常生活の中で現実的諸条件に適合するよう自己統制できる姿勢と力を獲得させていくものであり、またこれと同時に、真・善・美・聖などの「かくあるべき」価値を大切に、それを踏まえ、その一層の実現を目指して生きていく姿勢と力を獲得させていくものと言ってよい。ここでまさに問題となるのが、自分自身を統制していく際の拠り所とする具体的な価値規準として何を考えるべきなのか、その価値規準に基づく自己統制が本当に身につけていくためにはどうしたらいいのか、ということである。

【現代社会における自己統制の課題】

豊かで寛容な現代社会で特筆大書すべき点は、大人も子どもも欲求・欲望が肥大化していることである。マスコミ報道を通じ、さらには多様な商品やサービスの宣伝広告を通じて、日々新たな欲求・欲望が喚起されている。しかも、これをコントロールするには、これまで以上に強力な自己統制力が必要となるはずなのに、現代社会ではこれが育成され難い状況にある。「やりたいことを、やりたい時に、やりたいようにやる」という「快樂原則」が家庭でも学校でもそのまま是とされる風潮の中では、自分の欲求・欲望を抑制し、我慢をする、といった経験が乏しいまま成長していくのである。さらには社会そのものが物質的に豊かになり心理的に寛容になったことから、自分の欲求・欲望をそのまま充足しやすくなっており、また自分の情動や煩悩を野放しにしても大丈夫、という感覚が社会に拡がっている。慎みも賢さも、そして心豊かさも、その育ちの基盤そのものが危うくなっているのである。

さらに言えば、自己統制力を方向づける現実検証力の育ちの上でも、現代社会では大きな問題が見られる。子ども達が実物と触れ合う機会が乏しくなっているからである。草や花や虫や魚や小動物と毎日接して遊んでいた貧しい時代とは子どもの生活の内実が根本的に変化している。現代の子ども

あるのはテレビゲームやテレビやインターネット画面である。しかしながら、こうしたバーチャルな映像との接触を続けていくと、現実検証力が歪んでしまうのではないだろうか。さらには、子ども達が群れを作って遊ぶということも無くなっている。昔のように子ども達が小さな諍いを重ねながら一緒に遊ぶことを学んでいく中で、対人的社会的な現実検証力が育っていくといった機会も、現代の子ども達からは奪われてしまっている。

さらには、価値志向力も現代社会では決定的に弱化していることに留意すべきではないだろうか。自分の欲求・欲望を抑え、あるいは断念してでも、大事にし、追求すべき価値が存在するということを学ぶ機会が、現代の家庭生活の中でも学校生活の中でも、さらには社会生活のなかでも、ないままになっていると言ってよい。現代社会は価値観の点できわめて寛容であり、無原則的であり、放任的である。それが確かに人々の間に精神的な自由と解放感をもたらしている、というポジティブな面はあるにせよ、個人的利害を超えた人類普遍的価値が存在していること自体に無頓着であることは大きな問題であろう。

現代社会においては、極めて柔軟な形で自己統制の規準となる価値の問題を考えながらも、原理的な視点を堅持しながら、新たな決意をもって自己統制力を育成する道徳教育を推進していくことを考えなくてはならないのは、こうした現代的状況があるからである。

【日本社会の深層を流れてきた伝統的な価値規準】

自己統制の在り方を方向づける日本社会での価値規準、いにかえるなら道徳的価値規準を考える際、古来の神道で重視されてきた「明き心」「清き心」を、まず重視する必要があるであろう。これが「正直」や「誠心誠意」といった心の在り方を導く基盤的な価値規準となっていることは改めて言うまでもない。

こうした神道的基盤と並んで重視しなくてはならないのは、日本社会に早くから入り込み庶民に至るまで普及した仏教の影響である。「おかげさまで」と言い交わし合う中で暗黙のうちに前提とされている自己の驕りを排そうとする他動説的自己観、「諸行無常」をさまざまな文学作品の中で繰り返し描写してきたところにも見られる「何事にも執着しない」心性や「貧富や貴賤を基本的には一時の位」と見る平等的人間観は、特に重要なものではないだろうか。

そうした基盤の上に、中国から伝来された飛鳥朝以来の、特に江戸時代に体制イデオロギーともされ

た、儒教的な伝統がある。孔子の教えに基づき、四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）と五経（『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』）を学ぶ中で、「仁」「義」「礼」「知」「信」「忠」「誠」が長い間日本社会の上層階層に重視されてきた。そして「五倫」として、「父子の親」「君臣の義」「長幼の序」「夫婦の別」「朋友の信」が具体的な人間関係の上での規範とされてきた。

こうした基盤の上に日本社会での伝統的な道徳性の涵養が図られてきたが、明治初年以降キリスト教を土台とする欧米的な道徳的価値観が新たに流入し、それまでの武士道や町人道徳の形で我が国の社会的精神的な秩序を形成してきた伝統的な道徳的価値観との間に摩擦や衝突を生じることとなった。

明治12年（1879年）の夏、明治天皇の意志で侍講の元田永孚がまとめた『教学大旨』では、維新以降の急激な欧化主義的教育政策が「品行ヲ破り風俗ヲ傷フ者少カラズ」という状況を招いたとし、「教学の要、仁義忠孝ヲ明ラニシテ知識オ芸ヲ究メテ人道ヲ尽スハ、我祖訓国典ノ大旨、上下一般ノ教トスル所」であり、「祖宗ノ訓典ニ基キ専ラ仁義忠孝ヲ明ラカニシ、道徳ノ学ハ孔子ヲ主ト」する、とされる。

ここから、数学や理科など各教科の具体的な内容は欧米のそれに倣った欧化主義的かつ実学的なものであるのはよいとして、倫理や道徳という人格面での教育に関しては、伝統的な儒教主義でおこなわれなくてはならない、という考え方が確立していくことになる。まさに一つの「和魂洋才」の姿である。昭和20年（1945年）の終戦（敗戦）までの「修身」教育は、基本的にこうした考え方に基づいたものであっ

た。

「修身」という言葉自体が四書五経の一つ『大学』で「自天子以至庶人壹是皆修身以本」（天子より庶民に至るまで何よりもまず身を修めることを基本とする）に由来するものである。そして、個々人が身を修めることによって、家庭の、国の、社会全体の平安が実現するという儒教的倫理観（修身・齊家・治國・平天下）から言えば、個々人の「修身」こそがまさに全ての土台になると考えられることになる。

こうした儒教的道徳観は、特に明治23年（1890年）に発布された教育勅語において強調された次のような12の道徳的価値（徳目）に、よく表現されている。

- (1) 父母ニ孝ニ[親を大切にしよう]
- (2) 兄弟ニ友ニ[兄弟仲良くしよう]
- (3) 夫婦相和シ[夫婦は仲良くしよう]
- (4) 朋友相信ジ[友人同士は信頼し合おう]
- (5) 恭儉己ヲ持シ[自分の言動を慎もう]
- (6) 博愛衆ニ及ボシ[広く全ての人に愛の手を差しのべよう]
- (7) 学ヲ修メ業ヲ習イ[勉学に励み技能を身につけよう]
- (8) 知能ヲ啓發シ[賢明になるよう務めよう]
- (9) 徳器ヲ成就シ[人格を向上させよう]
- (10) 公益ヲ広メ政務ヲ開キ[広く世の人達や社会のために尽くそう]
- (11) 国憲ヲ重シ[国法ニ遵イ] [国の法令秩序を大切にしていこう]
- (12) 一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ[危急の場合には勇んで国のため社会のために尽くそう]

表1 「我々の世界」を生きることと「我的世界」を生きること

	【我々の世界】を生きる	【我的世界】を生きる
志向性	社会的位置・役割（職業・地位・収入・名誉etc）を生きる 世のため人のためを目指す	自分自身に固有の生を自覚し、深め、味わい、生きる 自分自身の充実・満足を目指す
基本的な自己観	人々の中での我 競い合い・支え合いの中の私	自分だけの自分 一人旅を余儀なくされている私
価値観の特徴	面子・名誉の尊重 権利・義務、義理・人情の重視 現実的な有効性・適切性の尊重	プライバシーの尊重 感銘・感動、出会い・共感の重視 内面的な意味感・充実感の尊重
期待され強調される人間的成長	世俗的な適応・対処能力 有効性を持つ知識・技能・マナー・判断力・問題処理能力など	耕され深められた内面世界 内的根拠に依拠して表現、発言、行動する姿勢と能力

（梶田，2009）

表2 学習指導要領「特別な教科 道徳」（2015. 3. 27 告示）における「目標」

「我々の世界」を生きるために	「我的世界」を生きるために
<p>B. <u>人との関り</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●親切、思いやり ●感謝 ●礼儀 ●友情、信頼 ●相互理解、寛容 <p>C. <u>集団や社会との関り</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●規則の尊重 ●公正、公平、社会正義 ●勤労、公共の精神 ●家族愛、家庭生活の充実 ●よりよい学校生活、集団生活の充実 ●伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度 ●国際理解、国際親善 	<p>A. <u>自分自身</u>（に関すること）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●善悪の判断、自律、自由と責任 ●正直、誠実 ●節度、節制 ●個性の伸長 ●希望と優き、努力と強い意志 ●真理の探究 <p>D. <u>生命や自然、崇高なものとの関り</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●生命の尊さ ●自然愛護 ●感動、畏敬の念 ●よりよく生きる喜び

【「我々の世界」を生きる上での価値規準と「我的世界」を生きる上での価値規準】

さて、こうした儒教的道徳価値の特色を一言で言えば、これは結局は「我々の世界」を生きることを考えた価値規準であって、「我的世界」を生きる上での価値規準としての色彩が極めて薄い、という点にある。そのためもあってか、現実的な社会秩序を大前提とした社会的規範という色彩が強く、基本的に現実適応的であり、TPO を超えてまで追求するような価値志向性の点では非常に弱いと言ってよい。

個々人は、人々の中で、社会の中でしか生きられないという生存様式を持っているが故に、基本的に、「我々の世界」（世の中）でどのように生きていくか、ということが常に大きな課題となる。だからこそ、その社会の一般的な秩序を反映した社会的現実の中で適応していくための自己統制が必要となるのは当然のことである。しかしながら、人はこれと同時に、独立した個体としての意識世界を持って生きている。このため、自分自身の独自固有な世界という意味での「我的世界」をどう生きていくか、ということをも考えていかねばならない。「我々の世界」で一般に美しいとされ、望ましいとされているものが私自身の実感としてはとてもそう思えないとか、それとは逆に、自分自身にとって価値あるものが一般にはそういう扱いをされていない、といったことが少なからず生じるのである。だからこそ、人は、

「我々の世界」と「我的世界」という互いに異なった価値規準をはらむ世界（表1参照）の双方を生きていかねばならない、ということになるのである。

社会に強く組み込まれている青年期において「我々の世界」のみに関心が行きがちになることも多いであろう。しかしながら、「我的世界」を生きる力＝自分自身を抛り所として精神的な一人旅をする力＝をも同時に育成しておかないと、自分自身の独自固有の人生を着実かつ充実した形でいきていくことは困難となる。特にこのことは、社会への組み込まれから解放されがちになる老年期において、誰もが痛感するところではないだろうか。自分自身の個人としての生活に充実感を与え、「生きがい」を与えてくれる内的な拠り所が十分でないままでは、人生そのものが空しくなる。そうすると、儒教道徳的な「修身・齐家・治国・平天下」という文脈の中に置かれるのではない別の意味での「修身」が、どうしても求められることになるのではないだろうか。さて、現在の我が国の道徳教育においては、この点はどのようになっているのであろうか。2015年3月27日に学習指導要領の一部改正として告示された「特別な教科 道徳」における道徳的価値規準は、「我々の世界」と「我的世界」との関わりということから見てみるならば、表2の形に整理してみるとできるであろう。このように捉え直してみれば、「我々の世界」を生きていく上での価値規準と

表3 「我々の世界」「我的世界」での2タイプの自己統制に関わる価値規準の例

現 実 適 応 的 的 V	<ul style="list-style-type: none"> ● 礼儀作法 ● 思いやりと奉仕 ● 公正と公平 ● 感謝と報恩 ● 社会的役割の自覚と誠実な遂行 	<ul style="list-style-type: none"> ● 身を慎む(節度・節制) ● 内的なけじめの感覚を持つ ● 暴飲暴食をしない etc ● 自分自身に対して誠実(真・善の尊重) ● 自分の実感・納得・本音の尊重 ● 自立と自律 ● 生活原理としての自己責任
人 値 志 向 的 的 V	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族親族への義理 ● 友人知人への義理 ● 自己の使命の自覚と真摯な取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> ● 無条件の愛 ● 敵をも愛せ! ● 生命の尊重 ● 全ての生命的存在の尊重と愛和 ● 美の尊重・追求 ● 感動する美術・音楽・文学等に親しむ ● 聖の尊重・追求 ● 畏敬の場・対象等を大切に求める

「我的世界」を生きていく上での価値規準が、現行の道德教育においては、少なくとも表面的には、うまくバランスをとった形で考えられている、と言っていいであろう。

【現実適応的か価値志向的かの別と「我々の世界」「我的世界」を生きることと】

ここで問題となるのは、先に挙げた2つのタイプの自己統制との関わりにおいて、「我々の世界」を生きる上での価値規準と「我的世界」を生きる上での価値規準とを、どのよう に考えたらいいのか、ということである。この問題については、例えば表3に例示するような形で道德的な価値規準の主要なものを考えてみるのできるのではないだろうか。

このように見てみると、現在の学習指導要領での道德的価値については、現実適応的な面が強く、価値志向的な面については必ずしも十分と言えないのではないか、という思いを持たざるを得ない。教育の最終目標とされている「人格の完成」を、現代社会の状況の中でどのように考えるべきか、もう一段の見直しが必要ではないだろうか。

関連文献

- 梶田叡一 (1993) 『生き方の人間教育を——自己実現の力を育む』 金子書房
- 梶田叡一 (2009) 『自己を生きるという意識』 金子書房
- 梶田叡一 (2014) 『不干斎ハビアン思想』 創元社
- 人間教育研究議会 (2013) 『新しい道德教育のために——徳性をどう育てるか (教育フォーラム 52)』 金子書房